



Title	巻頭言：効果的な継続看護教育を模索して：個別的教育の提供と教育担当者の育成
Author(s)	谷浦，葉子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2014, 20(1)
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/56749">https://hdl.handle.net/11094/56749</a>
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 効果的な継続看護教育を模索して ―個別教育の提供と教育担当者の育成― Designing an effective continuing education: Individual mentoring and training of educators

医療を取り巻く環境が時代の流れとともに変化するに伴い、臨床現場における看護職員の継続教育の課題も変化してきた。時代の要請に呼応してプリセプターシップやクリニカルラダーの導入、キャリア開発センターの開設など、大阪大学医学部附属病院看護部は時代に先んじた取り組みを試み続けている。本稿では大阪大学看護学雑誌が創刊された 1995 年頃から約 20 年にわたる看護部の継続教育の経過を振り返りながら、その変遷と課題について述べてみたい。

本誌が創刊されたのは、医学部保健学科が新設されて 2 年後の 1995 年である。保健学科の新設と期を同じくして医学部附属病院も大阪市福島区から吹田市山田丘に移転した。当時の看護部の看護職員数は約 500 名、新人の採用数は約 50 名であった。移転の翌年、看護部は新人教育体制としてプリセプターシップを導入し、主として臨床経験 3 年の看護師が指導にあたった。しかし医療の急速な高度先進化に伴って、現場で必要とされる臨床実践能力と看護基礎教育で修得する能力との乖離が顕在化してきたため、導入後約 10 年で制度の見直しを行った。新たな制度ではプリセプターの要件である臨床経験年数を 3 年から 5 年に引き上げ、より高い指導力の確保に努めるようにした。しかし当院の一般病棟における看護職員配置が「7 対 1 看護」となって以来、毎年多くの新人が採用されるようになり、例えば昨年度採用された新人は 99 名で 20 年前の約 2 倍となった。その新人が臨床現場で一人前に働けるようになるまでには 3 年～5 年を要しており、100 名を越えるプリセプターにとっても後輩の育成に大きな負担がかかるようになった。

一方、大学院教育や専門・認定看護師等の養成課程の整備が進み、看護職員の中にもキャリア志向をもつ者が多くみられるようになった。そこで当院では個人のキャリア開発をより推進することと、院外の看護師に教育の機会を提供することの二つを目的として 2004 年に看護部キャリア開発センターを設置した。翌年にはクリニカルラダーの認定制度を導入し、以前の臨床経験年数から看護実践能力に基づく教育体制へと大きく変容させた。その結果、現在の医学部附属病院における継続教育は、「一人前」にまで育成する段階別教育と、個々が自らのキャリアをデザインして看護の専門性を高めていくことを意図したキャリア開発研修の二本柱となった。

これらの経緯をふまえ、今日における継続教育の課題は、新人をいかに効果的に一人前の看護師に育てるかということと、ますます高度化する医療に対応できる看護実践能力を持つ看護師をいかに育成し定着させるかということに集約される。現代の若者は特に環境適応力の低下が著しく、患者へ看護実践を行う以前に職場における対人関係の構築につまずくケースが後を絶たない。また、患者の重症度比率と病床稼働率の上昇、さらには在院日数の短縮等により、先輩看護師たちも日々の仕事をこなすことに精いっぱい、看護の意味や「やりがい」が見えなくなりつつある。

ではその打開策は何か。それは効果的な教育の提供である。教育は体制の整備とパターン化した研修プログラムの実施のみで成果を期待できるものではない。質の高い看護が個別的であるように、教育も個別的であることが望まれる。それには、高度な看護実践能力を持ち個別的看護を提供できる人材とともに、看護教育に深い造詣を有し個別教育を担当できる教育者としての人材が不可欠である。そしてこれらの人材が、現場における看護の意義をいかに言語化し後輩に伝えていけるかということが問われている。これらを踏まえ、臨床における高度な看護実践者と看護教育者、そして看護管理者が各々の専門性を活かしてスクラムを組む将来的アプローチが望まれる。また保健学科と看護部が協働し、卒前教育から継続教育における緊密な連携を図ることも重要である。きたる時代のリーダーとなり、後輩にとってのモデルとなる看護実践者、看護教育者、看護管理者がますます増えることを願っている。

大阪大学医学部附属病院  
教育担当副看護部長 谷浦 葉子